

日本タイ学会・2020年研究大会
共通論題「タイにおけるコロナ禍の現状と今後の展望」

新型コロナウイルスは未だ世界で猛威をふるっており、完全な収束の見通しはたっていない。タイでは、中国以外の国では最も早い1月13日に最初の感染者を確認し、その後市中感染が広がった。9月15日現在、タイの新型コロナウイルス感染者は3,480人、死者数は58人であり、感染者はバンコク・メガリージョン（バンコク、および周辺11県）に約70%と集中している。5月末より市中感染はほぼゼロに押さえられており、防疫対策は概ねうまくいっているという評価が示されている一方で、3月26日に発令された非常事態宣言は期限延期が繰り返されている。

一見、国内の関心は感染症から政治の動きに移行しているように見えるものの、長期化し、複合危機化しているコロナ禍の経済・社会への影響は非常に大きい。世界銀行の予測では、タイは東南アジアの中で最も深刻なマイナス成長を示すことが予想されている。大規模な失業も発生しており、1997年の危機以来、約20年ぶりに深刻な経済・社会的な後退が生じることが懸念されている。他方で、感染症対策と経済の両立を図る「新常态」に向けての様々な取り組みの中には、社会のデジタル化の一層の加速や、新しいアイデアを生み出すような機運も見られる。コロナ禍が露呈する諸変化（加速、もしくは後退にかかわらず）は急に生まれたものではなく、タイの経済、社会、政治の構造や既に直面していた諸課題にも規定されている。

本セッションでは、タイにおけるコロナ禍の現状と今後の展望について、異なる分野の4人の専門家から話題を提供していただく。コロナ禍が現在のタイ社会に突きつけている諸課題、および挑戦について、会場も交えながら活発な意見交換を行うセッションとしたい。また、このような時代における地域研究の意義は何か、長期に渡ってフィールドを訪れることが出来ない中で、地域研究者の役割とは何か、についても考えてみたい。

【発表者】

1. 大泉啓一郎（亜細亜大学アジア研究所・教授）
「ポストコロナのタイを考える3つの視点」
 2. 高橋徹（日本経済新聞社アジア編集総局長）
「「コロナ対策の優等生」に映るタイのいま」
 3. 河森正人（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
「コロナ下の医療と社会一何が変わったのか」
 4. 岡野英之（近畿大学総合社会学部・特任講師）
「社会的経験としてのコロナ禍:何がどのように問題とされたのか」
- 司会：遠藤環（埼玉大学）・馬場雄司（京都文教大学）